慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば：その2陳衡哲(1)
Sub Title	
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.3 (2010.) ,p.200(23)- 222(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20100331-0222

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば
――その２　陳衡哲（１）

櫻庭ゆみ子

それはある夏のことだった。父がいつものように北方へ旅立とうとした矢先、母が倒れてしまった。母は自分が困った状況に陥っても騒ぎたてなかったので、父は気が気でなく、留守のときに母がちゃんと自分が勧めた医者に見てもらいにいったかを知りたがった。私はこのとき７歳になっていたが、手紙の書き方をまだ習っていなかった。今の子供たちは男の子も女の子も、この年になれば手紙の書き方を知っているだろう。けれども、当時は文言文（原文は Classical Style of write――訳者注）がまだ慣習となっていて、子供たちは、知識人階層が確立した伝統的な形式で書くように教えられていたことを思い出していただきたい。つまり、私は、しゃべったり考えたりしたものとまったく違った言葉とスタイルで書かなくてはならなかったのである。

1930年代、陳衡哲は Chen Nanhua というペンネームで英文の自伝 *Autobiography of A Chinese Young Girl*[(1)] を記しているが、その中で上記のように母の代筆をした状況を説明したあと興味深いことを述べている。

この言葉とスタイルは母が教えてくれた。こうして私は次第に書き方を学んだ。ただ、形式は定まっていても手紙の内容は多岐にわたる。母は忙しすぎて、こういった多岐にわたる内容をその都度決まった形式に当てはめるやり方を教える暇がなかった。それで、私は毎回の手紙の最初と最後の部分だけは慣習どおりに書くことができても、内容を表現する段階では創造力を発揮しなければならなかった。結果として、手紙の始まりと終わりは決まった形式と作法にのっとって書かれる一方で、内容の部分はこの地域の方言（native dialect）で書かれ、多くの言葉が、私

が貧弱な脳みそを絞って新たに考案した方言の音訳（sound of the dialect）となった。ある日こういった手紙のうちの一通を母が読んだ。母は笑ったが、言葉をかえずにそのまま父に送るようにといった。母は、手紙が心情をよく伝えかつ新鮮味にあふれてもいるからこれを読んだ父は喜ぶだろうと考えたのである。数年後、父が北京で世話になっていた叔父の娘から、最初の手紙を受け取ったとき、父も叔父もその独特なスタイルと新鮮な感触を大いに楽しみ、慣習的な書き方を無視したことは生意気だが独創的なものがあるとして、この書き方を続けるようわたしを励まし始めたのだということを聞いた。父から励まされたことなどほとんどなかったことを知っていれば、この励ましによって、独創的なやり方で手紙を書くことを実際とても楽しんでいた私の（作家になるという――訳者注）志がどれだけ強められたかがお分かりいただけるだろう。この一件から、私は多くのことを学んだ。たとえば、まず、自分自身の感情や考えを表す独創的な表現を見出すという興味深い仕事は思ったほど難しいものではないという確信を持つようになった。そして、わたしはアメリカ留学時代、一人の学生(2)が、中国の話し言葉（the Chinese vernacular language）を文言レベルのものにかえ、国民文学（national literature）の基礎にしようと努力しているのに共感を持つようになった。他の中国人留学生がこの文学改革の試みに強く反対したときも、私一人がこの孤独の戦士を精神的に支持した。ただ自分以外は誰も私が支持した理由を知らない。子供のとき、私が実際に発音していることば（spoken dialect）で手紙を書いたことが、少女時代に受けた知的教育の中で見つけた唯一の興味深くわくわくする出来事だったからである。私が愛する詩歌すらも、この自由な表現形式に及ばなかった。前者はどうしても受身となるが、後者は主体的で創造的だからだ。このことに付随するが、三番目に、私は自分の子供には、自分を表現するのに、手紙を書く場合でも、話し言葉（vernacular language）を使うように教えた。その結果は十分満足のいくものだった。

「しゃべったり考えたりしたものとまったく違った言葉とスタイル」とは、当時官僚層が共通の書き言葉として用いていた文言文のことである。この文言文への違和感が「自分自身の感情や考えを表す独創的な表現」、すなわちできる限り自分の感情や考えが親密に伝わるようなスタイルへの探求に向か

わせた。ここには、言葉を通じて人々に有益なメッセージを伝えることを追い続けた知識人、陳衡哲が物書きとなる原体験が示されている。

親密で生き生きとした「話し言葉」と、紙面に書きつけた途端に痕跡にならざるを得ない「書いた言葉」、両者の乖離に彼女はまず敏感だった。書くことを始めた当初から、士大夫階級の正規の書き言葉コードとは異なった言語のパロール領域に一歩踏み込んでいたのである。『自伝』では、随所に両親との意思疎通がうまくいかず悩む少女の姿が描かれているが、科挙の受験で忙しい父親と手紙を通じてでも意思疎通を図りたいという思いは、自らが母親となったとき、わが子の発するメッセージを微妙な感情のあやごと受け止めたいという思いにつながり、それが、万葉仮名よろしく、漢字を表音記号にして「お国言葉」の常州方言を表現した体験と重なって、話すように書く文体、「白話文」への確信を強めていったのではないだろうか。

言葉という複雑な道具をめぐる内面の思考の推移は、今後伝記的「事実」との照らし合わせしながら慎重に議論すべきだろうが、いずれにしろ、彼女の、すりぬけてゆく言葉をつかもうと努力する姿勢は、意味（内容・概念）を裏切る言葉というコードを使って意味（内容・概念）を伝達しなくてはならない知識人として、「書くことと生きること」が結びついた近代の知のあり方のひとつの型を示すといえる。そしておよそ100年前の中国江南の小都市[3]での一人の少女の言語体験は、メッセージ伝達の有効な方法をいまだに確立しえていない近代の空間に生きる私たちの前に、意外な新しさもって浮上する。この少女が、のちに、文盲率８割を超える当時の中国で世界の出来事を知らせる啓蒙的歴史家として著した『西洋史』[4]がベストセラー書となり、90年を経た今日、再び出版されて読まれるという事実を前にした時、陳衡哲の言語実践は、言葉をめぐる開かれた思考の領域に踏み込む何らかのヒントを提供してくれるように思う。教授という新たなエリートを示す肩書きのもとに、歴史の語部・記述者として彼女はどのようなメッセージを伝えようとし、その試みは成功したといえるのか。書き言葉の文体が揺れた20世紀初頭、文言文から白話文へと文体を変えていく過程で、彼女は、話すことと書くことの折り合いをどのようにつけていったのだろうか。

さて、この陳衡哲であるが、1916年当時、アメリカの留学生の間で韻文と散文の白話化をめぐって大論争が起きていたとき、いきなり白話文体の小説「一日」[5]を実践して見せ、白話で詩を書くことを主張して皆から大反対の憂

き目にあっていた胡適を支持したことは、文学史上よく知られた話である[6]。このように陳衡哲が文学革命の立役者の一人であることは以前より指摘され、最近でも、五四時期白話運動における女性のエクリチュールの角度から、「啓蒙／救国」のテーゼの陰に埋もれてしまった「小市民階級の女性知識人のつぶやき」としての彼女の創作における言葉の実践に復権を与える試みも始まっている[7]。日本では20年ほど前に山田敬三氏が、再評価されるべき「五四文学の基層を構成する作家」として紹介している[8]。そこでの紹介のように、陳衡哲の数は多くない小説、散文、詩作を、中国の現代文学成立初期に出現した作品群のひとつと規定し、そして早くから女性の自立問題にとり組んだ作家としてその作品を社会問題と結びつけ新たな分析を加えることも意味あることではある。また、教育界の組織のオーガナイザーとして重要な役割を果たした夫、任鴻雋[9]を視野に入れ、政治思想の傾向・党派性による区分が明確ではなかった1920年代前後、各種の領域の人々が行き来をしていた状況にたちかえって中国文化界の一面を見直す際にも、陳衡哲は貴重な存在である。しかし、もし彼女を、近代化の過程における中国知識人階層の女性の書き言葉という文脈においてみると、「五四文学時期の重要作家」という文学の殿堂に納めてこと足れるとするだけではもったいない興味深い試みを、実は彼女は試み、あるいは彼女自身が体現していることに気づく。1905年科挙の廃止によってエリートの意味するものが従来の科挙官僚から欧米または日本留学からの帰国組へと転換し、そして、女性にも従来男性エリートの特権であった文化の中枢部への参入の機会がめぐってくる。この状況をみたとき、たとえば、エリートたる切符を手に入れた女性はどのような言葉を自らの表現手段として持ち得るようになったのかという問がたてられるだろう。胡適を中心とする白話運動をめぐる議論のついでか、あるいは『狂人日記』より一年早い白話小説の試みという魯迅との対比で価値づけられることがほとんどの彼女自身の韻文・散文における白話の試みは、こういったジェンダーの視点を取り入れたとき、話し言葉／書き言葉を巡る興味深い様相を見せるのである。

1920年代、陳衡哲は当時商務印書館編集部長だった王雲五の要請で中国最初の中国人による西洋史の教科書『西洋史』を著した。著述の質でいえば、試作的性格の強い創作作品より、このベストセラーとなった『西洋史』やその補充として書かれたイタリア文芸復興の紹介に彼女の真骨頂がある。これ

らの教科書のいくつかの記述はすでに時代性を帯びたものとなっているが、復刻版が再出版され、21世紀の今日でも売れているのは、陳平原が評価する[10]ように、まるで語りかけ、歴史の現場に誘うような語りぐちの魅力によるといえる。読み手に語りかけ、物語に引き込むリズミカルな語り口は、彼女がアメリカ留学時代、中国人学生会ヴァッサー・カレッジ支部の英文報告で示して見せた調子と同質のものがある[11]。

胡適が白話化の試みの中で、音声と文字の乖離に無頓着[12]なままに話し言葉の統一の問題を置き去りにしたとしたら、一方の陳衡哲は、どれだけ意識していたかは別にして、音声、リズムを含めたより広い意味での文体に敏感だったように思えるのである。それは、あるいは、後に母となり我が子との意思疎通を重視するようになった結果かも知れない。しかし、少なくとも、『自伝』をはじめ、白話文体初期の試みは、文字のない言葉＝話し言葉（方言）、すなわち音韻がかかわってくる文体への敏感な感受性を示す。

この語り口への敏感な感受性に注目すると、陳衡哲の試みは、「話すように書く」ことをめぐる書き言葉と話し言葉の乖離を考える上で、普遍的な言葉の問題にかかわる問いを誘発するのである。

それでは一体書き言葉における文言文から白話文への転換が試みられる新文化運動の初期、彼女の白話化の試みはどのように進められたのだろうか。

今回は論述の足場となるいくつかの資料を提供しつつ、今後筆を進める上での枠組みを示したいと思う。

> 1919年６月、ミス・エラリーに別れを告げた時、彼女は、そう遠くない時期に中国であなたに会いますよ、とお答えになった。中国に帰国後、私は、マクラッケン教授ご夫妻およびヴァッサーでお世話になった先生たちから手紙をもらい、先生方が近く中国を訪問する予定であることを告げられた。けれども、ミス・エラリーが約束を果たした最初の方となった。

「Miss Ellery's Visit to China（ミス・エラリーの中国訪問――訳者注）」[13]と題した恩師の中国訪問記を、陳衡哲は母校ヴァッサー・カレッジの同窓会あてに写真付きで送っている。1923年11月にしたためられたこの手紙は、英文で５頁にわたり、ヴァッサー・カレッジでの彼女の恩師、歴史学教授のミス・エラリーを招いての銭塘江の海嘯見物の様子が数枚の写真つきで詳しく

紹介されている。海嘯見物に連れ立った面々は、陳衡哲、任鴻雋夫婦のほか、胡適、徐志摩、陶行知、王精衛、馬君武、朱経農、それに胡適に同行した曹誠英[14]と、曹を除いては文化、政治分野で活躍する欧米留学帰りの若きエリートたちだった。

いま少し陳衡哲の紹介を紹介しておこう。

> 日本の巨大地震を運よく免れたミス・エラリーと彼女のお父上は９月上旬に北京に到着されました。彼女から知らせを受けるとすぐに私は国立大学の教授である北京の友人の一人にミス・エラリーに電話で連絡するようにと電報を打ち、前もって日程が調整されていました。けれどもミス・エラリーとお父様は、私が願ったほどには北京を見て回らなかったようです。これはとても残念なことでした。というのは、北京は中国における政治・教育の中心で、彼女にはとても興味深く感じられるはずだったからです。ミス・エラリーが、北京とはかなり異なりますが、これまた中国の教育の中心である南京を訪問しなかったのは、さらに残念なことでした。上海といえばこちらは主に商業都市ですので、私の歴史の先生の興味を引きそうにはありません。ところがこれまでの損失を埋めるかのように、９月27日にお二人が上海にご到着されたちょうどそのとき、稀有な大自然の現象が起きたのです。

紀要に載せる単なる報告ならば、事実を簡潔に述べていけばよいと思うのだが、彼女はそうはせず、文体に工夫を施し、語りの効果を狙う。残念なことが続いた後にすばらしいことがおきたのですよ、とたたみかけるように物語に仕立ててゆく。

この英文での報告は、この後、夫の任鴻雋と一緒にエラリー父娘に会いに上海のパレスホテルに行ったこと、エラリー氏が、東京で遭遇した関東大震災のショックから回復しないので、ミス・エラリーだけが銭唐江へ海嘯見物に行くことになったこと、杭州行き列車のコンパートメントに落ち着いたところで、今回の見物の主催者である Mr. Tsemo Hsu（徐志摩――訳者注、以下名前の注は同じ）が Mr. K. Chu（朱経農）とそして革命家で国民的英雄となった Mr. Wang（汪精衛）を連れ立って現れたことを述べ、続いて具体的かつ詳細な描写が続く。

斜橋には10時15分到着、駅から河口まで歩いていたとき、Dr. Ma（馬君武）がすぐ横を歩いていることに気がつきました。「まあどうしてDr. Maが、」わたしは叫び声をあげました。「列車のどこにいらしたのですか？」「一等車ですよ」とDr. Maはにやりとしました。けれども、Mr. Wangが「なんてことありませんよ」と仕返しをしてくれました。「今日は一等車も二等車も同じなんですよ」（中国の列車は料金によって４つの等級に分かれているが、この列車は海嘯見物のための臨時列車だったので、等級の別は料金というより運だった）

これでは“ミス・エラリーの中国訪問”から話がだいぶそれてしまいますから、ここらで話を戻しましょう。川の土手近くに行くとすでに二艘の中国式の小船が待ち受けていました。Mr. Hsuが前もって借りてくれていたのです。そして、そこにはMr. Hsuが私たちのほかに招待した三人の方がいました。昔からの友人であるDr. Shih Hu（胡適）とMr. C.S. Tao（陶行知）、それからDr. Huの親戚のMiss Tsao（曹誠英）。こうして今や二艘のボートに10名がいることになりました。私たちは二時間ほどこの小さな川の上ですごし、途中で10人が一緒に小さなテーブルについて昼食をとりました。昼食は、典型的な中国の田舎料理で、素朴でしたがたっぷりと量がありました。ミス・エラリーはとても気に入って、船頭がすべての料理をボートの後部で作ったということをどうしても信じようとされませんでした。

それからわたしたちは陸に上がり、鉄道会社が海嘯の見物客のために設けた柵に人をかき分け近づいていきました。そして海嘯の到来です。太鼓を打ち鳴らす音か馬のいななきのような音が遠くで鳴り響いたかと思うと、うねりがどんどん近づき、そして、厚みのある堂々とした四角い輪のような、一気に突き進む合図を待っている横並びに並んだ船のようなうねりが目の前に聳え立ったのです。添付した写真はそのうちのひとつのシーンに過ぎません。それが目の前を過ぎていったとき写真をたくさん撮りました。このあと、私たちは急いでボートに戻ろうとしました。来たときと同じ４時50分発の特別列車に乗って上海に戻らなくてはならなかったからです。海嘯の見物客だけでなく、その数をはるかに上回る、見物客を見に来た人々の群れは、それはひどいものでした。ミス・エラリーとミス曹と私のためにMr. ChuとMr. Hsuが片側に杖で臨時の防御壁をつくり、使用人と船頭が腕でもう一方の防壁を作ってく

れました。そしてMr. Ren（任鴻雋）と一行の何人かの殿方が、押し寄せてくる群集の流れを後方でさえぎってくれました。こんなに見事に守られていても、それでもボートまで行き着くのは一苦労でした。それでも私たちは手足を折ったり青あざを作ることなく、ボートまでたどり着いたのです……（訳者略）……。

この後、手紙に添付した写真に写っている登場人物たちの略歴紹介[15]があり、そして、胡適、徐志摩と分かれて上海に戻った三人が、翌日任鴻雋の案内で商務印書館見学をしたこと、翌々日、陳任夫婦で上海の欧米留学帰りの知識人たちを招きエラリー父娘を囲んでのホームパーティがあったこと、その翌日、上海のパレスホテルで分かれの食事をとった話が続き、報告が締めくくられる。

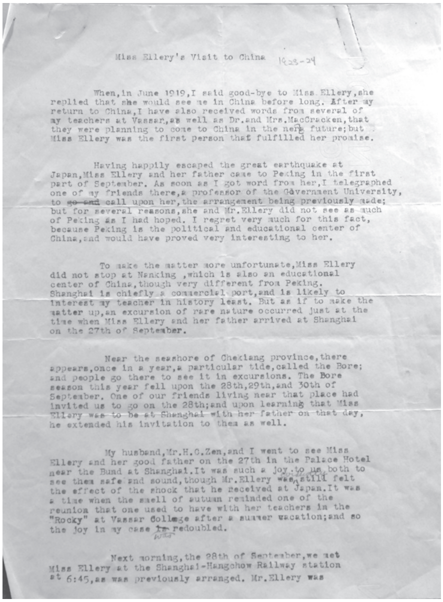
この手紙で紹介された1923年９月28日に行われた海嘯見物だが、これは徐志摩の日記と読み合わせると、興味深い当時の文化人交流図が出来上がる[16]。小説家としては数編しか残さなかった陳衡哲を、もし、教育、文化交流と広げた文脈におくと、夫の任鴻雋とともに、近代教育の整備に尽力し、国際文化交流に少なからずの貢献をした別の顔が見えてくるはずである。海嘯見物でヴァッサーの看板の歴史学教授と資産家であるその父親を招き、中国の文化界の若いリーダーたちに引き合わせたように、任鴻雋と陳衡哲の夫

Special Collections, Vassar College Libraries

婦は主に南方の知識人たちが行きかう一種の磁場のようなものを提供していたようである。多くは欧米留学帰りの人々で構成されるその文化サロンともいうべき場で飛び交う言葉に焦点を合わせると(17)、英語その他の言語と中国語を併用し、構造の違う言語間の双方向での表現を実践していた近代の中国特有のひとつの知識人の型が浮かび上がってくるだろう。

しかし大変興味深い当時の文化サロンを再現する前に、ここでは上記の文章が、現在ヴァッサーのアーカイブに残されている他の手紙とともに、中国からアメリカ東海岸の母校に送っていた英文の手紙のひとつであることに注目したい。手紙、それは独白ではない、語りかける相手を常に意識しながら、状況の再現を効果的に行うために配慮がなされる形式である。ここで陳は中国の状況を理解しない異文化圏の人々に中国の様子を伝えるために、抽象的、あいまいな表現を避けて、できるだけ具体的にわかりやすく、かつ面白く生き生きとした表現になるように文体に工夫を施し説明している。言葉のコードが違う相手に思ったこと考えたことを伝えるという状況は、陳衡哲が７歳のとき、考えたり感じたりしたことをできる限り伝わるよう漢字を表音記号として使い、方言を「話すように」書いた行為の延長上にある。さらに言えば、解釈に推測の余地を残す文言文からより意味を明らかにする「白話」へ転換する各種の思考を繰り返した彼女にとって、英語で書く報告は、説明口調で話すように書く、白話化への実践のステップともなりえたのではないか。

その意味で、アメリカへ留学し、英語圏と中国語圏の両者の狭間に身をおいたことは、彼女の言語実践にとって大きな経験となったといえる。周知のように、陳衡哲は、銭唐江海嘯見物に先立つこと９年前の1914年、義和団事変賠償金奨学プログラムの第一期女子留学生としてアメリカ東海岸に留学する。そして、ニューヨーク州北部で一年間の準備期間を経て1915年にヴァッサー女子大学に入学し、西洋史と文学を学び、４年後、優秀な成績で卒業したあと奨学金を得てシカゴ大学大学院に入り、引き続き西洋史を学ぶ。1920年夏に修士論文(18)を提出して帰国し、蔡元培の招聘に応じて北京大学初めての女性教授となる。その後妊娠を機に職を辞し、商務印書館の要請に応じて西洋史の教科書編纂準備に取り掛かり、胡適の運営する『努力週報』に寄稿、また夫、任鴻雋らとともに雑誌『科学』の編集に携わり、任鴻雋が中心となって活動する中国科学社の活動にも参加し、創作、時事評論、文学評論と旺盛な執筆活動を繰り広げるようになる。これが銭唐江見物が行われた



Miss Ellery's Visit to China 1923-24

When, in June 1919, I said good-bye to Miss Ellery, she replied that she would see me in China before long. After my return to China, I have also received words from several of my teachers at Vassar, as well as Dr. and Mrs. MacCracken, that they were planning to come to China in the near future; but Miss Ellery was the first person that fulfilled her promise.

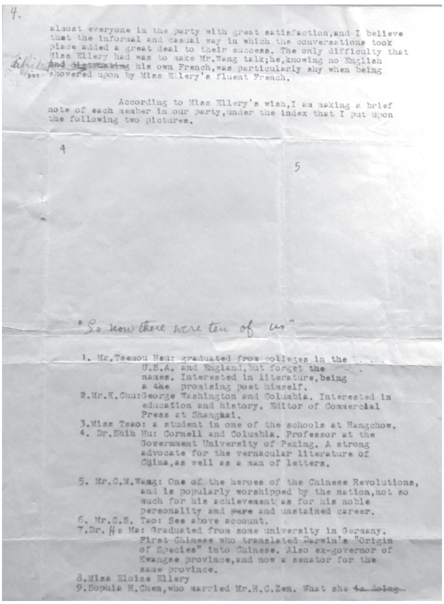
Having happily escaped the great earthquake at Japan, Miss Ellery and her father came to Peking in the first part of September. As soon as I got word from her, I telegraphed one of my friends there, a professor of the Government University, to ~~go and~~ call upon her, the arrangement being previously made; but for several reasons, she and Mr. Ellery did not see as much of Peking as I had hoped. I regret very much for this fact, because Peking is the political and educational center of China, and would have proved very interesting to her.

To make the matter more unfortunate, Miss Ellery did not stop at Nanking, which is also an educational center of China, though very different from Peking. Shanghai is chiefly a commercial port, and is likely to interest my teacher in history least. But as if to make the matter up, an excursion of rare nature occurred just at the time when Miss Ellery and her father arrived at Shanghai on the 27th of September.

Near the seashore of Chekiang province, there appears, once in a year, a particular tide, called the Bore; and people go there to see it in excursions. The Bore season this year fell upon the 28th, 29th, and 30th of September. One of our friends living near that place had invited us to go on the 28th; and upon learning that Miss Ellery was to be at Shanghai with her father on that day, he extended his invitation to them as well.

My husband, Mr. H. C. Zen, and I went to see Miss Ellery and her good father on the 27th in the Palace Hotel near the Bund at Shanghai. It was such a joy to us both to see them safe and sound, though Mr. Ellery was, evidently, still felt the effect of the shock that he received at Japan. It was a time when the smell of autumn reminded one of the reunion that one used to have with her teachers in the "Rocky" at Vassar College after a summer vacation; and so the joy in my case ~~is~~ was redoubled.

Next morning, the 28th of September, we met Miss Ellery at the Shanghai-Hangchow Railway station at 6:45, as was previously arranged. Mr. Ellery was



4.

almost everyone in the party with great satisfaction, and I believe that the informal and casual way in which the conversations took place added a great deal to their success. The only difficulty that Miss Ellery had was to make Mr. Wang talk; he, knowing no English ~~and distrusting~~ difficulty in his own French, was particularly shy when being showered upon by Miss Ellery's fluent French.

According to Miss Ellery's wish, I am making a brief note of each member in our party, under the index that I put upon the following two pictures.

4

5

"So now there were ten of us"

1. Mr. Tsesou Hsu: graduated from colleges in the U.S.A. and England, but forget the names. Interested in literature, being a ~~the~~ promising poet himself.
2. Mr. K. Chu: George Washington and Columbia. Interested in education and history. Editor of Commercial Press at Shanghai.
3. Miss Tsao: a student in one of the schools at Hangchow.
4. Dr. Shih Hu: Cornell and Columbia. Professor at the Government University of Peking. A strong advocate for the vernacular literature of China, as well as a man of letters.
5. Mr. C. M. Wang: One of the heroes of the Chinese Revolutions, and is popularly worshipped by the nation, not so much for his achievement as for his noble personality and ~~pure~~ and unstained career.
6. Mr. C. S. Tso: See above account.
7. Dr. Ho Ma: Graduated from some university in Germany. First Chinese who translated Darwin's "Origin of Species" into Chinese. Also ex-governor of Kwangse province, and now a senator for the same province.
8. Miss Eloise Ellery
9. Sophia H. Chen, who married Mr. H. C. Zen. What she ~~is doing~~

Special Collections, Vassar College Libraries

1923年当時の陳衡哲の状況だった。当時、銭唐江で、平民教育の試みに没頭していた陶行知がミス・エラリーと教育問題で熱く語りあったように、若きエリートたちの間では、国民国家建設に向けて教育の問題が議論の的となっただろうし、そこでは言うまでもなく「国民国家」の成員にふさわしい「国民」を育成するための言葉の問題は切実な問題だった。実際の発音上の統一への動きはさらに後になるとしても、1917年から本格的に始まったとされる「書き言葉」における白話化への転換は、20年代当初はまだ過渡期にあり、1920年代当時は言語表現がゆれていた時期だった。統一した表現となる「国語」の成立の要請は、陳衡哲の周囲の留学帰りの若き知識人たちを次々と言語実践に駆り立ててゆく。そしてそこでの言語の様々な実験の中で、外国語を介しての白話化の試み、つまり翻訳を通じての中国語の白話化の実験は、従来想定された以上に有効な方法だったのではないか。陳衡哲たちアメリカ留学組にとってその外国語とはもちろん英語である。中国語と英語の二つの言語間の頻繁な往復運動による口語化の試み、陳衡哲にとって、1914年から1920年の留学時代がそれを行う好機だったことは言うまでもないだろう。事実、彼女は英語―中国語の相互翻訳を数多く試みている。

胡適はアメリカ留学時代、白話による詩を実践する前段階として、文言文の詩をより説明的な表現方式を使って英語詩に直す、または英語で詩を書きそれを中国語の詩に直すという試みを行っている。それに関してはすでに指摘されている[19]が、実は陳衡哲も似たような試みをしているのである。

たとえば、陳衡哲と任鴻雋と胡適、この三人の生涯にわたる友情は、中国文学史の麗しい挿話としてよく知られているが、三人を結びつけたひとつのきっかけに、陳衡哲が任鴻雋の詩に返す形で送った二首の五言絶句がある。1916年秋、この詩に感服した任鴻雋が胡適に見せ、それに「情景が目の前に浮かぶようだ」と感嘆した胡適が、「陳衡哲女士詩」として11月17日の日記[20]に記した次の二首である。

「月」
初月曳軽雲　笑隠寒林裏　不知好容光　已印清渓底。

「風」
夜聞雨敲窗　起視月如水　萬葉正乱飛　鳴飆落松蘂

この二首は6ヵ月後に題名をそれぞれ「寒月」「西風」に、また「西風」では第3句目を「萬葉撲窗飛」に変えて『留美学生季刊』に発表される[21]のだが、その前時、つまり任鴻雋と胡適を感心せしめた同じ時期、陳衡哲は自ら次のように英語に直しヴァッサーの紀要に発表している[22]。便宜上、直訳をつけておく。

中国語の二つの韻文からの翻訳 “Vassar Miscellanea Monthly”, January 1917

The Autumnal Wind

Tappings of rain upon my window ?
Yet how brilliantly the moon shines !
Ah ! Ye fluttering leaves, and thou,
The Whistling Wind in among the pines,
What a fool ye made of me!

秋の風

こつこつ雨が窓をたたいているのか
それなのに月の輝きのなんと明るいこと
ああ、お前か、はためく木の葉と、そしてお前は
松の木立を吹き抜ける風
まんまとお前たちにだまされたわけか。

Moonlight on Vassar Lake

With a trail of fleeting clouds,
The Crescent Moon herself hides
In a veil, woven with twigs ;
And smiles a smile of mischief.
Scarcely ever she dreamt
That there, in rippling streamlets,
The Water’s silvery face

Is betraying her radiance.

ヴァッサー湖の月光

逃げ行く雲のたなびきに
三日月が身を隠す
ベールに包まれて、小枝の重なりのかげで、
いたずらっぽく笑う
彼女は夢にも思わないでしょう
ほらそこに、さざなみだった渓流に
まばゆい水面が
彼女の光をうらぎっていることを。

この英語詩は、題名に季節（秋）と場所（ヴァッサー湖）を指定してより具体的に示すなど、五言絶句の中国語の詩より説明的である。中国語の詩の方では一つ一つの漢字に凝縮された意味が余韻を伴って読者の想像力にゆだねられ、くっきりとしたイメージを浮かび上がらせる効果をあげているが、英語詩では想像力の領域に言葉が一歩踏み込み、情景・状況の描写の後に「落ち」の説明がなされ、因果関係が説明付けられて謎解きがされる。自由詩だが時に行の最後に似た音が並ぶことでリズミカルとなっていること及び簡潔かつ客観的な描写に、当時欧米で起きていたイマジズムの影響を見て取れないこともないが、それにしても、言葉で語りかけるように説明された英語詩のほうは、中国語の詩に比べ意味がより明白となり「白話化」していると言えるだろう。また、「風」で、英語詩への翻訳を間にはさんで第三句目が「正乱飛」からより聴覚への注意を促すのに効果的な「撲窗飛」へとかわったのがFulatterに触発された結果だとしたら、別言語への言い換えによる言葉の再生産というパターンをこの時期から実践していたといえるだろう。

彼女の中国詩の英語訳あるいは、英語での説明はこれが初の試みではなく、この前の年に「詩経」の一部を翻訳紹介した「A Glimpse of Chinese Poetry.（中国詩一考）」[23]をやはり紀要に掲載している。それ以前にもヴァッサーでは学生や教師のために非公式の中国語の勉強会を開いて中国語を教え、中国の詩について語っている。絶えず中国語の詩や文章を英語に直して直接目の前の読者、あるいは聞き手に紹介するという作業を行っていたので

ある。英語に訳すということ、すなわち絶句、律詩といったスタイルを持った詩の構造をいったん分解し、散文化して説明する、この英語への翻訳の過程は、中国語において形式をもった文言文をより自由な話し言葉へ直していく過程に類似する。そしていったん英語に直して散文化した詩から中国語に再翻訳することで自由詩へと行き着くことが容易となる。英語を媒介として詩の白話化が行われうるのである。この過程のひとつの成果が、1919年に『新青年』に発表された自由詩『人家話我発了痴』ではなかったか。さらに陳の場合、中国語の英語への翻訳紹介、それは文字を通してだけではなく、アメリカ人に口頭で説明するといったように、実際に声を通しての「語り」かけがあったということは見落とすべきではない。

また彼女は、1916年の夏、学生大会で中国語による演説を行い、賞を獲得した後、それを翌年の三月、中国語の季刊誌『留美学生季刊』に発表している(24)。胡適の『新青年』に発表された「文学改良芻議」が同時掲載された号である。1917年時点『新青年』の方では、すでに多くの文章が白話で書かれていたが、任鴻雋が主編に当たった『留美学生季刊』は白話化にはより慎重な姿勢をとり、胡適の「文学改良芻議」を含めてこの号はほぼ文言文が占めていた。その中で陳衡哲の演説の草稿のみが唯一白話の要素の強い文となっている。自ら編集に加わっていた陳衡哲が、ここにわざわざ白話的な演説原稿を入れたのは、話すように語る文章の試みの提示という明確な意図があったように思える。

演説といえば、清末日本に留学した秋瑾が演説練習会を組織し、自らもかの有名な「二億の女性同胞に告ぐ」を著したのは周知のことであり、演説に使われた原稿は、多少文言的な表現は混ざるものの白話文として通用するものである。梁啓超を熟読していた陳衡哲が(25)、演説を白話文のたたき台として、如何により話し言葉に近い文章語を作っていくかという課題へのいたって意識的な試みを行ったことは単なる偶然ではない。小説を思想・知識の伝達の有効な道具とみなした梁啓超が日本の政治小説を翻訳紹介したのはほんの十数年前のことである。学のない一般女性に向けてできる限り卑俗な言葉を使って語りかけた革命家、秋瑾の語りかけと違って、一応近代的な女子教育の端緒が開かれた時代に位置した陳衡哲の場合、呼びかけの対象は、まずは自分と同程度かそこまで行かなくても最低限初等教育を受けた層であり、そして、そこでの文体は、より格調を高め、効果を狙って文学用語として練り上げていったものとなる。陳衡哲自身が「語るすべのない彼女たちの代弁

をすること」と創作を雑誌に発表することの意味を明確に述べている[26]ように、彼女にとって創作とは、単なる感情の発露ではなく、内なる声は人類共通の、少なくとも「私たち同胞」に共通する心の叫びの代弁であり、言葉でうまく表現できない「彼女たち」に代わって人々に知らせるという啓蒙活動と切り離せない。けれども陳衡哲の「啓蒙」は、常にそして後に『観察』雑誌に次々と投稿する文章においても、「何を」のみならず「如何に」伝えるかという様式への気配りを忘れることはない。

1918年『新青年』に掲載した[27]彼女の初めての白話詩『人家説我発了痴』を最後に見ておこう。まずこれには文言文による以下の序文が付いている。

「気がふれたなんて」

1918年6月上旬、ヴァッサー女子大学で第53回卒業式が挙行された。わたしはそのときちょうど入院していたが、ある日、校内半週刊を手にとり盛大な式典の予告と50年前の同窓生一同が集ったという喜ばしいニュースを読んでいたとき、突然ドアが開いて70才ほどの老婦人が入ってくると、身振りを交えてしゃべり出した。その話を一時間ほどじっくり聞いているうちに、わたしはどうにもやりきれない気持ちになってきた。こういうわけで彼女の話の要点を書き出し、半週刊の余話に供しようと思った次第である。
1918年6月中旬　　衡哲

ハハハ、皆が私のことを気がふれたといってここに閉じ込めたのですよ。
わたしも50年前ヴァッサーで学んだから、わざわざ後輩たちの卒業式を
見に駆けつけたというのに。
住まいはリンカン、ここから1500キロは離れているところ。
ところで気がふれた人間をみたことがおあり？
気がふれた者は人に遇えばひっぱたき物をみれば蹴っ飛ばすもの。
もしも私が気がふれているなら、
ほうら、こんな風にあなたをひっぱたこうとするはずでしょう
何を話していたのだっけ
そうそうおもいだした。
リンカンのことを話してたわね。
昔の同級生がリンカンで、この地に来たらコテッジに泊まったらと誘って

くれた。
だからすぐ学校の執事に手紙を書いて申し込みをしたところ、
やってきたらなんと名簿に名前なし、泊まるところなどは論外というありさま。
それだってたいしたことではないけれど。
この同級生が急に病気になって、それで私が看護婦がわり、
難儀した馬車での数日間のうえに、
その晩もまた一睡もできず。
翌日医者がやってきたら、
私が気がふれたといって、
ここに送り込んだというわけ。
その上私の息子に電報を打って、
正気を失ったからすぐに迎えに来いですって。
息子がいるのはリンカンの西千キロ、ここから
２千五百キロは離れたところ。
かわいそうに電報はさぞかしあの子を驚かせたでしょう。
しかもどうやってすぐにここに来られるというの。
ハハハそろそろお休みの時間ね。
私もおいとましなくては。
お月様の向こう側でまたお会いしましょう。
ああ、この金の鍵をご存じ。
自慢するわけではないけれど、
これでも若いときは一目置かれていたのよ。
これも余計な話
リンカンを経つ前の日に親戚友人大勢が馬車を取り巻いて言ったもの。
「東部のヴァッサーに行くなんてあなたはなんて幸せもの。
いろいろなニュースをみんな覚えておいて。
帰ってきたら事細かく聞くからね」と
「もちろんよ」と私は答えたもの。
この大ニュースが、なんと私が気がふれたことなんて。
明日私が帰途についたら
法螺をいくつか吹かないと、
さもなきゃ物笑いの種にされるじゃない。

ハハハ皆が私が気がふれたと言ってここに押し込んだのよ。

『人家說我發了痴』
陳衡哲
哈哈！人家說我發了痴、把我關在這裡。
我五十年前也在藩薩讀書。因此特地跑來、看我
　小姊妹的卒業禮。
我的家在林肯離開此地共是一千五百里。
你可曾見過癡子嗎？
　癡子見人便打、見物便踢。
我若是癡子、
　你看呀—我便要這樣的把你痛擊！
我方才講的什麼？
哦！我記得了。
我不是講到林肯嗎？
我在林肯的時候、我的老同學約我到此後、在一
　個院子裏住。
我便立刻寫信給校中的執事、報名注冊。
豈知到了此地、冊上名也沒有、便不要說起我們的住處。
這還是小事。
我的同學忽然病了、他們便叫我作他的看護婦。
可憐我車子裏幾天的辛苦。
　那晚又是一夜沒睡。
明天一生便來、
　說我發了痴、
　把我送到這裡。
他們又打電話給我的兒子、
　說我智識沒有了、叫他立刻就來。
我兒子他在林肯的西方一千里、離開此地共是
　二千五百里。
　可憐那個電報定要把他嚇死。
　況且他又如何能立刻趕到這裡？
哈哈！你要睡去了嗎？

我可該走了。
我們在月亮的那面再見罷。
哦！你可知道這個金匙是什麼？
我不瞞你說、
　我年輕的時候、可也不算是一個平庸的人哩。
這也不必提起。
記得我前天離開林肯的時候、有無數的親戚朋友、圍繞了我的車子、
說、『你東去藩薩真是福氣。
　你須把各種的新聞一一牢記。
　回來我們可要細細的問你。』
我說、『這個自然。』
那裏曉得我的大新聞、
　就是說我自己忽然變了一個癡子！
明天我回去了、
　少不得要幾句謊話
　不然、豈不要被他們笑死。
哈哈！人家說我發了痴、把我關在這裏。
（『新青年』　第５卷第３号　1918年９月15日）

これは偶然のいたずらで精神異常扱いされたヴァッサーの元優等生だった女性を通じて、盛大な式典の邪魔となる事態を排除しようと動いた紳士淑女たちの虚栄虚偽、そして事態の滑稽さと愚かしさをそれとなく示した風刺詩である。まず、書き手は前置きでことのあらましを述べた後脇に下がり、精神錯乱を起こしたとされる老婦人に語り手の席を譲る。この老婦人は気がふれたわけではなくてごくまっとうである。それどころか自立した女性の育成を目指した名門校の卒業生らしく、自らの不運を自嘲する余裕すら見せている。このような人物を主人公として、彼女に語らせるという形式は物語の運びを容易にすると同時に、事件の当事者による話という形式が真実味を醸し出す。また、彼女の自嘲の笑いも含めた会話体が、発話の生き生きとした感覚を伝え臨場感をもたらす。読み手は事の次第を述べる老婦人のイメージを思い浮かべることができるだろう。つまりここでは会話体という形をとった白話の散文詩が試みられているのであり、登場人物に語らせた言葉から真実を浮きあがらせようという、かなり野心的な試作である。当時『新青年』雑

誌では白話詩の様々な試みがなされていたが、韻も踏まず、言葉の繰り返しもなく、そして第三者の直接会話という形にしてここまで散文化した詩は、この1917年の時点ではまだ多くはない。この詩の斬新さは、同じ雑誌の同頁に並んだ胡適の一人称形式の散文詩と比べるとさらにはっきりするだろう。だが、ここで指摘しておきたいのは、気のめいる事態と前置きしながら、運命のいたずらを豪快に笑うヴァッサーの元優等生の姿を戯画めいた描写で示す独特の叙述方式が、『新青年』が開拓した「啓蒙と救国」というテーマ性の強い叙述からどこか外れる要素を帯びているということである。さらに言えばこれは後に、日常の些事の具体的な描写で卑近性、俗性を示し真実を提示するという、やはり外国文学の翻訳作業を通じて自らの文体を確立していったのちの楊絳にも通じる叙述・語り口である。つまり陳衡哲と楊絳を結ぶ共通項を見た時、ここに白話文が成熟してゆく過程で存在したひとつの可能性の存在を見て取ることはできないかということである。

ではこういった彼女の語りが、中国における「近代化」の進展とともにどのような運命をたどるのか。意味を裏切る言葉というツールを使って思想を伝達しなくてはならない知識人の一人として、逃げる言葉をどのように追っていったのか。「学術的白話人」と呼ばせた文体の意味するものは何か。こういった『西洋史』から『自伝』へと続く「語り」の特質にかかわる問を頭におきながら、陳衡哲の英語文化圏との接触の有様、文体の「白話化」の状況をもう少し丁寧に追っていきたいと思う。

注

（1）Chen Nan-hua. *Autobiography of A Chinese Young Girl,* Peiping, China: September 1935。シカゴ大学蔵書。尚この中国語訳として次のものが刊行されている。馮進訳『陳衡哲早年自伝』安徽教育出版社、2006年。

（2）胡適のこと。

（3）江蘇省常州。陳衡哲はここで生まれ13歳までの少女時代を過ごす。

（4）陳衡哲著の《西洋史》は2007年に中国工人出版社と東方出版社から出版。中国工人出版社版に付録として1926年出版の際の胡適の序がついている。

（5）『留美学生季報』第４巻第２号（1917年６月）。

（6）ただし、すでに指摘されているように、「一日」は、純粋な白話文と言うよりは白話と文言が混ざった過渡期の言葉遣いであり、女子学生寮の一日を主に女子学生たちの会話で綴ったスケッチ風の内容に思想的な深みがあるとはいえないという点から、小説としての完成度は「狂人日記」に及ばない習作と位置づけられている。

（7）王桂妹「《新青年》中的女性話語空白」『文学評論』2004年1月。

（8）山田敬三「陳衡哲小論・関連資料――五四文学の基層作家郡」『未名』第6号、1986.10。尚この資料の所在は長堀祐造氏からご指摘いただいた。

（9）任鴻雋（1886-1961）四川省重慶生まれ。化学者、教育者、社会活動家。最後の科挙合格世代の秀才。1908年日本留学中に同盟会に入り、1911年年武昌で武装蜂起に際して帰国し、孫文の臨時総統府で秘書を務めるが、袁世凱の大総統就任に憤って職を辞しアメリカにわたる。コーネル大学で科学学士、ニューヨークのコロンビア大学で化学修士号をとり1918年帰国。科学の発展を促進して中国を救うという考えのもとに「中国科学社」を立ち上げ、中国初の科学総合雑誌≪科学≫を創刊し、西欧の科学思想、文化を翻訳紹介。天文学、海洋生物学、地質学、物理学、微生物学等、近代的な学問領域の知識の紹介を本格的に行い、中国の科学の発展に多大な貢献をした。近来、陳衡哲とともに見直しがなされている。経歴の詳細は「五十自述」「前塵瑣記」（ともに任鴻雋著、樊洪業・張久春編集『科学救国之夢―任鴻雋文存』上海科学教育出版社・上海科学技術出版社、2002年所収）、『陳衡哲任鴻雋家書』搶救民間家書項目組委会編、商務印書館、2007年等参照。

（10）陳平原「那些让人永远感怀的风雅―任鸿隽、陈衡哲以及“我的朋友胡适之”」『書城』2008年4月。陳平原はこのエッセイ風の紹介で、陳衡哲の文章の意義は、学術論文における白話文を広めたことにあると言っているがこれは妥当な評価だろう。ちなみに北京大学図書館所蔵の『文芸復興小史』の貸借履歴を見ると、1930年当時多くの学生が借り出して非常によく読まれていることがわかる。

（11）“Club News Vassar” *The Chinese Students Monthly*, November 1916.

日本語に訳すと以下のとおり。「ミス・ルーシー・ヤン（陳衡哲と同期の政府派遣留学生、楊銧英のこと――訳者注）と私は生活面でも学問の面でも二人ともかなり「鮮やかに」こなしています。達成ということで言えば、幸運にまだ見放されていないと大手を振っていえます。それ以上を言えば慎みを欠くことになりますので申しませんが。今でもかなり頻繁に中国を「知りたくてたまらない」アメリカの人々に肩のこらない形でお話しをしています。けれども、もっと興味深いことは、ここの女子学生たちが中国語を習うのに夢中になっていることで、おかげで私たちは先生として実にすばらしい時を過ごしています。

ここの学生と教師たちがますます中国に興味を持つようになったと考えられます。ヴァッサー月刊論集に私の「中国詩小考」が掲載されてから学生たちがますます興味を持つようになっていますし、また私の歴史の教授からも絶えず、中国の革命の要因や現象、何がかけているのかなどをフランス革命の研究、それはこのカレッジでも最新の最もすばらしいコースですが、それと平行させて研究することを進められていることからもうかが

えます。ミス・ルーシー・ヤンはお兄様と一緒にクリスマスを過ごすためにワシントン DC に行く予定ですが、私は、二回目のクリスマスを迎えるとき、少なくとも休暇の何日かは静かで雪に閉じ込められた「見捨てられた村」で精神的な休養に費やすつもりです。Miss Sophia Chen.」

(12) 村田雄二郎「「文白」の彼方に―近代中国における国語問題」『思想』岩波書店、1995年 7 月。

(13) Vassar College 図書館 Archives&Special collections 所蔵。タイプライター打ちの手紙と写真は Vassar College 図書館のご好意で閲覧および転載の許可を頂いた。

(14) 曹誠英と胡適の関係については、蔡登山『何處尋你――胡適的戀人及友人』（INK 印刻文學生活雜誌出版社、2008年）参照。

(15) 写真には人物に番号が振られ以下のような説明が付いている。

1、Mr. Tsemou Hsu 忘れてしまったが、アメリカとイギリスの大学を卒業。文学に興味を持ち、本人も才能ある詩人である。

2、Mr. K. Chu: George: ワシントン大とコロンビア大卒。教育と歴史に興味を持つ上海の商務印書館で編集に従事。

3、Miss Tsao: 杭州の学校の学生。

4、Dr. Shih Hu: ドクター Shin Hu: コーネル大、コロンビア大卒。北京大学教授。文学者であると同時に中国における白話運動の強力な推進者。

5、Mr. C. M. Wang: 中国革命の英雄の一人。成し遂げたことのためよりは高潔な人柄と立派なキャリアによって国民の崇拝の的。

6、Mr. C. S. Tao: 上記のコメント参照。

7、Dr. Ho Ma：ドイツのいくつかの大学を卒業。ダーウィンの『種の起源』中国語訳の最初の翻訳者。前広西省長、現元老。

8、Miss Eloise Ellery

9、Sohia H. Chen: Mr. H. C. Zen と結婚。彼女が中国でここ三年してきたことはヴァッサーの別の紀要に報告されるだろう。

10、Mr. H. C. Zen: コーネル大学、コロンビア大学卒。科学に興味を持っているが、文学者でもある。中国科学社の代表であり、シャンは愛の商務印書館の編集者でもある。

(16)「西湖記」十月一日『徐志摩日記四種』159-160頁。

(17) ホームパーティーの状況についてはたとえば、次のような娘の回想を参照。『任以都先生訪問紀録』中央研究院近代史研究所、1993年。

(18) タイトルは“The intercourse between China and the West in Ancient and Mediaeval times（221B.C.-1367A.D.）”

(19) 李丹「胡適：漢英詩互訳、英語詩與白話詩的写作」『文学評論』2006年 4 月。

(20)『胡適留学日記』（四）遠東出版公司、台北、1986年、148-149頁。

(21)『留美学生季報』第 4 巻第 2 号（1917年 6 月）。

(22)“Translation from Two Verses in Chinese” *Vassar Miscellany Monthly*

(1917. 1): 96。Vassar College 図書館 Archives&Special collections 所蔵。

(23)“A Glimpse of Chinese Poetry.” *Vassar Miscellany Monthly* (1916.11): 11-15

Vassar College 図書館 Archives&Special collections 所蔵。

(24)「和平與争戦」『留美学生季報』第3巻第5号（1917年3月)。

(25)『自伝』では、父親が梁啓超に文章を気に入り、『新民叢報』の影印版を購入しており、これを陳衡哲が熟読したことが書かれている。

(26)『小雨点』（新月書店1928）自序。「中国現代文学史参考資料」として影印されたものを使用。

(27)『新青年』第5巻第3号（1918年9月15日)。

付録

陳衡哲著訳目録（1910-1924）

今回論述に関係する時期のみ掲載。作成に当たっては、山田敬三「陳衡哲小論・関連資料」（注8）及び『陳衡哲任鴻雋家書』（注9）も参考にした。

1910　「改暦法議」『東方雑誌』第9巻第2号。※現段階では公けにされた最初の文章。言文による翻訳紹介。

1915.03　「致某女士書」『留美学生季報』第2巻第1号。

1916.03　「記藩薩女子大」『留美学生季報』第3巻第1号。

09　「永久之和平果可期乎」『留美学生季報』第3巻第3号。

11　“A Glimpse of Chinese Poetry.” *Vassar Miscellany Monthly* (1916.11): 11-15

“Club News: Vassar” *The Chinese Students Monthly,* November 1916.

五言絶句「月」「風」を任鴻雋に送る。

12　「東美中国学生年会記事」『留美学生季報』第3巻第4号

1917. 01　“Translation from Two Verses in Chinese” *Vassar Miscellany Monthly* (1917.1): 96。

1917. 03　「和平與争戦」『留美学生季報』第3巻第4号。

06　「記某軍官之言」、「寒月」「西風」、「一日」『留美学生季報』第4巻第2号。※「一日」が初めての白話体散文。

1918. 06　「記藩薩火災」『留美学生季報』第5巻第2号

「召夕列」『留美学生季報』第5巻2号

07　“The Early Chinese Poetry.” *Vassar Miscellany Monthly.* Alumini, Zen, 1919. Special Collections, Vassar College Libraries.

09　「夕照山暮望」『留美学生季報』第5巻第2号。

1918. 09　「人家説我発了痴」『新青年』第5巻第3号。※初めての白話詩。これ以降、韻文・散文ともに主に白話体で書かれる。

10　「老夫妻」『新青年』第5巻第4号。

1919. 05　「鳥」、「散伍帰来的『吉普色』」『新青年』第 6 巻第 5 号。
　　8.9　「加拿大露営記」
　　修士論文“The intercourse between China and the West in ancient and mediaeval times（221B.C.–1367A.D.）”。シカゴ大学図書館所蔵。
1920. 09　「小雨点」『新青年』第 8 巻第 1 号。
　　10　「波児」『新青年』第 8 巻第 2 号。
1921. 10.9.「紀念但丁」（12月 1 日発表）。
1922. 10　「孟哥哥」『努力週報』第23期。
　　12　「綺琴文化」『努力週報』副刊第 4 期。
1923. 03　「吃先生的日記」『努力週報』第42期。
　　「私的心」『努力週報』第43期。（サラ・ティーズデールの翻訳詩。任鴻雋と共訳）
　　4.10　「介紹英国詩人格布生」『東方雑誌』20巻第 7 号。
　　05　「完全不是那麼一回事」『努力週報』第52期。
　　06　「晩上的西湖」『努力週報』第58期。
　　07　「題風景冊」「晩景一則」『努力週報』第63期。
　　08　「我要去了」『努力週報』第66期。
　　09　「対於今後日本的一希望」『努力週報』第72期。
　　10　「近作西洋史序言」『努力週報』第73期。
1923. 06　「研究歴史応具的常識」、「読書随筆」『努力週報』副刊第10期
　　11　“Miss Ellery’s Visit to China” ヴァッサー大学図書館所蔵。
1924. 01　『西洋史』（上巻）、商務院書館。
　　07　「運河與揚子江」『東方雑誌』第21巻第13号。
　　08　「国家教育與国際教育」
　　09　「西風」『東方雑誌』第21巻第17号。
　　10　「洛綺思的問題」『小説月報』第15巻第10号。